

「間違ってる、世の中が間違ってるんです！」

数ある客席の一つから、荒げた声がする。

「いいですか、ツンデレとは本来そのような軽いものなんかじゃないんです！顔を赤らめながらちよつとどもりがちに突き放した言い方をする、それだけでツンデレなどとは笑止千万！そんなね、形式張ったものでツンデレを語って欲しくないんですよ。本物のツンデレというのは、もつと殺伐とした、そんな中でも愛……」

「店内で騒ぐな！」

テーブルに片手を突き誠の方へ身を乗り出しながら興奮していた奴隷一号の後頭部に、パソコンと軽快な音を立て銀トレイを見事にヒットさせる。

「他の客に迷惑だろうが。まったく……」

叩いた銀トレイを持ったまま腰に両手を当て睨みつける。さして強く叩いた覚えはないが、叩かれた一号は僅かに涙目となりながら後ろにいる私の方を振り向いた。

「じよ、女王たん……」

まったく……声を荒げて話すことか？そもそも、そんな下らない話を誠にするんじゃないわよ。

「はは、ゴメンお姉ちゃん……」

苦笑いを浮かべながら、誠が私に謝罪する。見ようによつては誠の方が被害者って気もするんだけど、まあ同席してるから同罪なんだと思ってるんでしょね。ホント、この子は律儀なんだから。

誠は気が弱い反面、氣立てが良い。誰彼となく低姿勢で優しく接し、すぐにうち解ける事が出来るようで……私と出会い、この奴隷一号や店のみんなと顔を合わせるようになってから、たった数日という短い期間でもうとけ込んでいる。最初の内は私も私達の保護者も、妖怪だの妖精だの妖魔だの、そんな連中が集うこの店やこちら側の世界で落ち着いた生活が出来るのかどうか不安だったんだけど……なんて事はない。むしろ楽しんでるようにも見えるわ。

「まったく、何しに来ているんだお前達は。騒ぐならとつと出ていけ」

楽しむのは良いんだけどね、誠……こんなのに染まらないでよ？お姉ちゃんそれが心配だわ。

「そんなあ、折角女王たんのメイド姿を拝見つかまつるため、いざメイド喫茶とはせ参じた拙者にそのようなご無体を……」

「日本語で話せ」

これだからオタクは……カッコイイと思ってるのか？その妙な言葉遣い。

「まあまあ……うん、それにしても似合ってるよ、お姉ちゃん」

一号への矛先を反らせてやるためののか、それとも、その……なに、私のこの格好を本気で褒めてるのか……うー、弟を前になに照れてるのよ私は。

今日私は普段のゴスロリ衣装ではなく、当店標準衣装であるメイド服を着ていた。誠が是非一度見てみたいって言うから……うー、あのゴスロリはある種の「戦闘服」と思っ
て着てるから普段恥ずかしくないんだけど、こーいう着慣れない、それでいてあからさまな

衣装は……ここが狩り場の路地裏とかなら、まだいいんだけど……。

「なによ、あまりジロジロ見るんじゃないわよ」

「折角着てくれたんだもん。見ないわけにはいかないよ」

この……可愛い顔してそんな事言われたら……。

「そーっすよ！ いや、流石女王たん！ 何を着ても萌えます！ 萌え萌えです!!」

……ありがとう、一号。あなたのおかげで吹っ切れた。誠からの視線は気になるけど、お前や他の人達からの視線は慣れてるからどーでもいいわ。そもそも、萌えとかそーいう感じに男を欲情させるのが本来の私なんだしね。

「ならじつくりお姉ちゃんの事見てなさいよ、誠。それとも、もっとこのへんをじっくり見たいのかな？」

一度吹っ切るとなんのことはない。私はスカートの裾を掴み、ゆっくりと持ち上げていく。スカートと白いニーソックスの間にある素足の部分、一号達の言う「絶対流域」の部分がより広がっていく。

「あー、その、いいよ、無理にそんな……」

ふふ、顔真っ赤にしちゃって可愛いわあ。そうそう、やっぱり誠は私にからかわれてこそかわいげがあるというものよ。

「おおおおー、いやはや、素晴らしいです!」

いや、お前はどうでも良いから、一号……柏手かしわてを打つな、拜むな!

「……ともかく、騒がないで。もうすぐ終わるから、誠はもうちょっと待ってて。一号は消えろ」

「うう、その扱いは酷いです……」

「ははは……」

酷いも何も、本音だ。お前がいなければ私はもつと誠といちゃ……ん、まあ、ともかく私は二人に嚴重に注意し、仕事に戻った。戻るところでホール長や同僚達と目が合う。なによその目は……はいはい、もー好き勝手に言っくなさいよ。何言われたってね、もう慣れたわ色々。私も誠もね。

あれから二号も三号も来店し、店内にはトレイの音が高らかに五発は鳴り響いたかな。まったくあいつらは……いちいち騒ぎすぎなのよ。そもそも、このメイド服は誠が見たいって言うから着ただけで、あいつらに見せるためではないのに……まったく。そもそもあいつら、これよりもつと露出度の高い服ならいっばい、それこそ露出度高めのメイド服ならこの前見せてあげたばかりじゃない。あいつらが言うには、それはそれ、これはこれ、だそうで……まったく、なんだろうね。男っていうのはホント……。

「あの……お姉ちゃん。もう充分見せて貰ったから……着替えないの？」

仕事も終わり、私は店の外で待っていた誠と合流した。その誠が、こともあろうにその誠が、メイド服のままできてあげてるのに不満を口に出している。店内で大騒ぎしていた奴隷達とは真逆の反応だ。まあもちろん、誠だって店内では嬉しそうにしてたけど。

「あら、つれないわねえ。あなたが言うから折角着たのに、もう脱げっていうの？」

私は誠の腕に抱きつきながら、上目遣いに尋ね返した。

「だって店の外でそれは……恥ずかしいよ」

顔を真っ赤にして照れる誠。くー、この反応が初々しいわね。ふふ、もつと恥ずかしそうな顔をたつぷり見せて貰うんだから。

「仕方ないじゃない、私この服を着たまま店に来たんだもの。他の服なんて無いわ」

着替える以前の問題なのよ。家からこの格好で出てきたんだからね。そもそも、私は服を何着も所持していない。家を持たなかった私は当然自分のクローゼットがあるわけでもなく、男を狩るために用意した服を三着所持していた程度。それをずっと着回していた。ちなみに洗濯などは保護者の屋敷でやってたわ。プレイ用のコスプレなんかは奴隷達が用意したのを着てただけだしね。

「この前一緒に買いに行っただじやないか。普段は出来るだけ、普通の格好しててよ」

「そうだったわね。すっかり忘れてたわ」

もちろん、嘘。私だっていくら妖怪でも人間社会の常識くらい知ってるわ。単にこれは、誠を困らせるためだけにしているだけ。ついでに……。

「あーそうだ。こつちをはくのも忘れちゃった」

チラリと、スカートをめくり中身を誠に見せる。いや、中身が無いことを見せる、と言うべきかな？ そう、私は今下着をはいていない。

「ちよっ、お姉ちゃん、いくら何でもそれは……」

「ほら、早く帰らないと大変よ？ ノーパン幼女を連れ回してる姿なんかお巡りさんにも見つかったら、職務質問されて……あらあら、誠君は変態さんとして逮捕されちゃうわねえ」

ゆだったように顔から首から真っ赤にした誠が、急ぎ足で私を連れて歩き出す。

「あらダメよ、そんなに急ぐとかえって怪しまれるわよ？ そうそう、普段通りゆっくりね……ふふ、みんなに見られてるけど気にしちゃダメよお？」

クスクス……もー誠ったら可愛いわあ。立場が立場なら、この「羞恥プレイ」は私がされてる側。だけどこの場合、受けているのは誠の方ね。メイド服を着せた女の子に腕を組ませて連れ回す、これだけで充分目立つのに、私が下着をはいていないのがバレたら……ん、私まで興奮してきちゃった。誠とは全く違う理由で、私も早く帰りたい心境になっていた。

「あー疲れた」

家に帰り着き、私は早速真新しいダブルベッドに身を投げる。ここは私達の家。誠は両親と離れ一人暮らしを始めていたので、私達の保護者の提案もあり二人で住めるマンションへと引っ越してきたばかり。誠の両親へは保護者から上手く話を通して貰ったんだけど……私のことは上手く誤魔化しながら、よく納得させたわよね。あんな体型でも、やることはやるから……侮れないわ。もちろん私達としては助かってるけど。

「まったくあいつらはもう……もつと静かに出来ないのかしらね」

ベッドの上で私は仕事の愚痴をふと漏らした。もちろん、意図して道中のことには全く触れない。

「……ふう」

誠はといえば、家にたどり着けた安堵感から大きく息を吐き出していた。彼も疲れたでしょうね……肉体的にはなく、精神的に。

「あら、何が不満なの？」

「……お姉ちゃんの意地悪」

恥じらいながら私を睨みつける誠……もー、そんな誠の顔が可愛いわぁ。頼なんか膨らませちゃって。

ホント……こうも一人の男に入れ込むようになるとは思わなかったわ。プラコンとか言われるのは癪^{しゃく}だけど……そもそも誠が弟だったとかそーいう話はもう……どうでもいいわ。ただ私は誠が気に入って、誠が私に惚れている。それだけでいいじゃない。

「可愛かったわねー、ずうっと下向いちゃって、顔真っ赤にしちゃってさぁ」

「酷いよぉ……」

口を尖らせてまだ不満を言う誠。仕草が子供っぽいのよねえ……そこが可愛いんだけど、二十歳の青年だって自覚はあるのかしらね？ そうそう、誠は二十歳の大学生だったのよ。少年以上青年未満っていう印象は、当たらずしも遠からずってところだったのよね。

「でも嬉しかったでしょ？」

言葉に詰まる誠。クスクス、もう、本当に素直な反応するわねえ。

「お姉ちゃんがだあい好きな君は、とおっても嬉しかったでしょお？」

口を尖らせまだ不満だという態度は残しつつ、軽く頷く。こうも素直だから、また虐めなくなっちゃうのよね。ホント、誠のおかげで自分がここまでサディストだったんだって知ることが出来たわ。

「メイド服のお姉ちゃん可愛らしかったし……腕組んで歩けたのも嬉しかったけど……でも、その、下着ははいてよお願いだから……」

ちよつと涙目。うーん、ここまで行くとやりすぎたかなあってちよつぱり反省するわ。

「判った判った。誠が可愛いからつい虐めたくなっただけ。今度からはちゃんと下着はくから……それよりほら」

すつと、スカートを持ち上げる。下着をはいていないお尻がチラリと見えているはず。それを誠が凝視し始めた。

「興奮しちゃって収まりつかないでしょ？ ね、折角だからこのまましちゃお」

収まりつかないのは、私も同様。誠のために下着をはかないままだったけど、それは流石に私だって恥ずかしかったし興奮した。それにこんな可愛い誠を見ていたら……したくなつて当然じゃない。

「ほら、裸になって横になりなさい……あ、そうだ」

いつものように命令口調で誠に指示を出したところで、私は閃いた。

「裸になって横になってください、ご主人様」

「はい？」

内容は同じだが、口調を変えた。これには誠も眉をひそめている。

「メイドの私が、ご奉仕いたしますわ」

そう、折角だからこういうプレイをしようかなって。普段「女王たん」なんて呼ばれる私がメイド役に徹つしてみるのも悪くないんじゃないかな？ 男を狩るときなんかは大人しい女の子を演じるけど、メイドは私も経験がないし、新鮮で刺激のかもしれないわ。

ほら、誠もまんざらじゃない顔してるわ。

「まあ、ご主人様つたらもうこんなに……」

顔だけじゃなく彼自身とつても素直。早速裸になった誠、彼の肉棒は既に硬くなっており、力強くそそり起っている。それを見て私の口元が自然とつり上がる。

「ではご主人様、ご奉仕させていただきます」

言うなり、私はベッドに横たわった誠に近づき……彼の息子に触れる。
足で。

「ちよっ、お姉ちゃん」

「丹誠込めて「足コキ」させてもらいます」

ベッドの上に立ち、私は誠の息子を足で踏むように乗せ、そしてゆっくりと動かし始めた。これをご奉仕と言えるかどうかはさておいて、白いニーソックスをはいたままされる足コキに、誠は戸惑いながらも息を僅かに弾ませてきた。素手とは違う感触、こそばゆい肌触り、微妙な足の圧迫……上下にゆっくりとこすられ、先ほども息子はすすくと成長を始めている。

「あらあら、ご主人様はとっても感じやすいんですね。もうこんなに大きくして……ご主人様は恥ずかしくないんですか？」

優しい口調で言うてはいるけど、ニヤニヤと笑いながら言い放たれる私の言葉はその口調と釣り合って無いわね。うーん、どうしても地が出ちゃうわ。でもまあ、これはこれでなんか良いかも。

「ではもつとご奉仕してあげますね」

私は軽く開いた足の間に腰を下ろし、両足で息子をはさみ、不規則に足をこすり合わせる。絶妙な摩擦と圧迫、時折親指でカチを刺激するなどのテクニクも織り交ぜながら、丹念に誠と彼の愚息を愉しませる。

「うっ……」

効いてる効いてる……うっ、気持ちよさそうな顔しちゃってもお……そんな顔されたら、虐めたくなっちゃうじゃない。

「このくらいでよろしいですか？」

突然、私は足を止める。あと僅か、刹那もあれば爆発するという直前になって。その上でよろしいですか……あはは、誠つたら切なそうな顔しちゃって。

「も、もうちよつと続……」

「ではご主人様、次はわたくしめにご褒美をくださいませ」

……あ、涙目。大丈夫よ、ちゃんとフォローはしてあげるから。それより……私がダメなのよ。こっちが我慢できないの。私は手早く誠の顔をまたぎ、スカートをまくり、腰を僅かに落とす。

「さあご主人様、早く舐めてください」

下着をはいていなかったから、誠からは既にぐっしりと濡れた私の淫唇が丸見え。口とは裏腹に、私がつつと興奮していたことがこれでばれてしまった。

「なんだ、もうこんなに濡らして。お前は本当にいやらしいメイドだな」

だからかな。誠がご主人様の役へ積極的に乗り出した。台詞口調とはいえ、誠の言葉に私は頬が熱くなるのを実感する。誠からは見えていないだろうけど、たぶん、誠も私がど

んな顔をしているのかくらい想像できているんだろうな。だって、私が何も言わず強引に腰を落とし私の淫唇と彼の唇とでキスを迫ったから。これが照れ隠しだって、すぐに判っちゃっわよ。

「んっ、そ、いいわ、ご主人様……」

誠の舌が淫唇へ、そして中へと触れ、レロレロと動き回る。まだまだテクニクと呼べるような舌使いじゃないけど、私は敏感に反応してしまった。それに気を良くしたのか、誠は舌を動かしながら手を私の尻へと回し、軽くなで回す。

「あつ、それ……もつと強く」

自分から腰をもそもそと少し動かしながら、強請ねだつてしまう。そんな私の態度に誠の中でどんな感情がわき起こったのか……普段の彼らしからぬ行動に出てきた。心をくすぐら「ひっ、ちよっ！ も、いきなり！」

コリツと、軽く歯で小さな陰核をいじる誠。敏感になっている陰核にそんな事されたら、私だつて声を上げるわ。誠はその陰核をケアするように、今度は舌で嘗め回してくる。それがむしろ激しい刺激になって私の全身を小刻みに振るわせてくる。

「やつ、やるようになったわね……いい、そこ、もうちよつと大胆に……」

言われるまま、誠は舌を大きく使つて陰核と淫唇の表面を嘗め回す。トロトロと流れ出ている愛液が彼の唾液と混ざり、ピチャピチャといやらしい音を立て私の耳に届く。その音にまた私は興奮し、誠へ私のジューズをどんどん注いでいった。

こうなると……私は誠のジューズが飲みたくなってくる。

「ご主人様のも……あは、こんなにしちゃって」

本当ならこのまま身体を倒し舐めさせたまま誠のを舐めたいところだけど……残念ながら私の体型は幼女。残念ながら口は届きそうにない。だから私は、精一杯手を伸ばして誠の肉棒を掴んだ。

「ご主人様も気持ちよくなつて……ん、ビクビクしてる」

先ほどまで足コキをされていたのもあるのだろう。ビキビキと音を立てそうなほどに誠の肉棒は硬くなっていた。もう後数回擦るだけで白いジューズが飛び出してきそう。

「さあ、ご主人様……このままこつちに飛ばして、ねっ……んっ！ あは、たっくさん飛びましたねご主人様」

跳ねる肉棒は狙いが定まらず、白濁液を周囲にまき散らしている。私は自分の顔に掛かったその白濁液を指ですくい、ぺろりと口に含む。苦みのある、私の大好きな味が口に広がっていく。

「美味しいですご主人様……ん、ご主人様、私のは美味しいですか？」

「うん、とつても……美味しいよ。おね……メイドのいやらしい……えつと、ラブジュースが、どんどん溢れてくるよ」

慣れない言葉遣いと興奮とで嘔み気味になりながらも、誠はジュールジュールと私のジュースを啜すすりながら答えている。ふふ、懸命なその姿がまた可愛らしいわね。

「んっ、ご主人様……も、もう、そろそろ……」

言うなり、私は腰を浮かせた。もう待てない。ずっと嘗め回されていたから、膣の奥がうずいてうずいて仕方ないの。私は急いで腰の位置を顔から彼の腰へと移動させ、また天に向けいきり起ってきた彼の息子を荒々しく掴む。そして慣れた手つきで自分の陰部へと

向けさせ、すんなりと腰を下ろした。

「んんっ！ なに、またこんなに大きくさせてたの……本当にいやらしいんだから……ご主人様は」

罵りながら、まだ忘れていなかったシチュエーションを付け加える。そして私は前後に腰を動かしながら身体を上下に揺り動かす。

「ん、はっ、はぁ……なんか、いつもより、大きくない？ ん、んっ！」

そういう私も、いつも以上に膣の締め付けをキツくしている。小さな身体同様に膣も小さいが、しかしそれでも彼の息子をすんなりと受け入れている。それだけずっと濡らし続けていたってことかな……だってもう、待てなかったんだもの。

「ね、ご主人様も、動いて、下から、突き上げ、て」

誠が私に合わせ腰を下から打ちつけてくる。いつも以上に私たちの結合部からはグチュグチュといやらしい音が聞こえて来た。止めどなくあふれ出る私の愛液が、突かれる度に周囲へ飛び散っているのが見える。

「ひあっ、ん、なん、か、ちがう、いつもと、んっ！ い、いいかも……どう、きもち、いいの？ ごしゅじん、さま、は」

手を誠のお腹につきながら、声を途切れ途切れにさせながら尋ねた。誠は答える代わりに、より激しく腰を振る。

「ちよっ、も、とつぜ、んっ！ や、ちよっ、いつも、ん、ちがっ、てっ、なん、かつ、んっ！ やっ、あっ、あん、あはあ、んっ、んん！」

気持ちよすぎて、あまりに気持ちよすぎて、手で自分を支えられなくなってきた。私は誠の上へと倒れ込む……しかしそれでも、私の腰は止まらない。当然誠のも。

誠が小さな私の身体をギュッと抱きしめる。私は誠の胸に顔を埋め、彼の乳首に唇を這わせ舐め始めた。ふふ、優しく抱きしめたって、攻めるのは止めないんだから。姉の攻めに気を良くしたのか、負けられないと思ったのか、誠はベッドのきしみをより大きくさせてきた。

「んっ、チュ、ん、んん！ クチュ……ん、んあ！ やっ、ん、チュパ……」

……本音を言えば、いつもより感じているのをごまかしたかった。誠にここまで感じている自分が急に恥ずかしくなっただけで、誠の乳首を舐めることでごまかしたかった。でも限界ってあるわね……声が漏れちゃう。感じすぎて……ああ、誠にばれちゃったかな……チラリと上、誠の顔をのぞき見ると、やっぱり……ニコニコしてこっちを見てる。もう、そんな顔で見ないでよ……可愛い誠に、可愛い姉って思われちゃったかな。それはそれで……でもやっぱり……ん、もう、気持ちよすぎて、考えがまとまらない！

「んっ、も、ちよ、ダメ、んっ、チュ、ん、んっ！ いっ、ちや、め、ダメ、んは、ん、んはぁあー！」

自分から先に逝くなんて、言えない。出来ない。姉のプライドが、モー・シヨボーとしてのプライドがそれを許さない。膣に力を込め、子宮口すら攻めの道具にし、誠の肉棒を攻めに攻めまくる。あ、ダメ……子宮口にガンガンぶつかってかえって感じちゃう……でも、でも、誠だっただけ……。

「そろそろ、いく、いくから……」

「え、ええ、いって、いき、いきなさい、よ……いっ、いっしょに、いって、あげる、か

ら、んっ、ね、ほら、はや、くっ！ んっ、あ、ああっ！」

誠から根を上げるのを聞き届け、私はそれを待ってたとばかり堰を切り逝くことを促す。ズブズブと激しく腰が動き、ぐぐつと膣が内側から圧迫される。もうすぐ、ほら、もうすぐ……来る！

「はやく、はやく！ ほら、ちよっ、いつ、いつて、ん、あっ！ きた、しろいの、わた、わたしも、あっ、ん、んん！」

どうにかプライドを死守した私は、まるで突くように勢いよく飛び出す白濁液を子宮で受け止める。その美味しいジューズを根本から吸い上げようと更に膣をギュツと締め付けた。誠は息を荒げながらまだ私を抱きしめていた。本当はこのまま余韻を楽しみたかったけど……私は半身を起こし僕の腕をほどいてしまう。

「ご主人様にしては上出来だったんじゃない？ 気持ちよかったわよ」

ちよつと強がり。今まで色んな男達を相手に、いかに気持ちよくなれるか、いかに長持ちさせるかなんてあれこれ手を尽くしてきたのに……こうもアツサリ、我が弟にそれらの問題を解決されちゃったんだもん。ちよつと悔しいじゃない？ なんてだろうね……正直テクニクとか、まだまだなっていないのに……って、もし誠がこれ以上テクニクを身につけたら……私はゾクツと背筋を振るわせた。これ以上気持ちよくなれる……その興奮と幸福に、胸を高鳴らせてしまう。

「ところでご主人様？」

なら今からでも、そう、まだまだ足りない……私は腰を回しくチュクチュクと音を鳴らせた。私達はまだ繋がったままだったから。

「次はアナルなどいかがですか？」

私の提案に少し驚いたようだけど、誠はすぐに頷いた。

「ふふ、ご主人様のエッチ。ではこの次はアナルで……」

そう言いながら、私の腰は止まらない。うん、本当にアナルを攻めて欲しかったんだけど……なんだか腰を動かしたら、こっちもまた欲しくなっちゃった。

「ん、もう堅くなってる……本当にご主人様は、スケべなんですね」

せつかくだからアナルはこれの次。さて、続けるにしてもこのまま同じ体位は面白くないなあ……と思っていたところ、誠が半身を起こし私を抱きしめてきた。

「ご主人様？」

「舐め……るんだ、この淫乱メイドめ。ボクの乳首を舐める」

「ふふ、この変態主人。たっぷりと舐めてあげるわ」

もう既に「主人とメイド」って感じではなくなってるけど、この遊びはとりあえず続けてみる。たぶん私がここまで感じるのには、このちよつと変えた趣向のせいじゃない。誠と身体を何度も重ねてきた、その結果だと思う。なんとなく、そう思った。姉と弟。妖怪と人間。色々考えると、背徳的な関係にある私達。それでもこうして抱きしめ合って、お互い感じて、気持ちよくなってる……もつともつと、深く深く、繋がっていききたい。そう思い始めている自分に戸惑いつつも、私は誠を求めていく。

「んっ、ご主人様……気持ちいい？ 良いなら声を出して」

「きつ、気持ちいいよ……もつと、もつと舐めて、腰をもつと、動かして……」

「うふふ……ええ、ご主人様がお望みなら。たっぷり、可愛がってあげる」

変態っていえばそれに当てはまるのかな。ふふ、変態でも良いじゃない。気持ちいいんだから……それでいいじゃない。

「ほら、聞こえる？ ジュブジュブって、私達の繋がってるところから……いやらしい音がしてる」

「うん、聞こえるよ……いやらしいね、とつても、いやらしいよ……」

私の頭を撫でながら、誠が息を荒げながら答えてる。可愛いなあ……本当はキスしてあげたいところだけど、私からは無理だ。ちよつとこの幼女体型でいることが切ない。

「顔を上げて、姉さん……んっ」

「誠……ん、キスのおねだり？ しょうがないご主人様……」

誠から求めてくれた。気持ちを通じたみたいでなんか嬉しい……私は誠の首に精一杯手を回し、唇を重ねる。まだちよつと残っていた私の愛液の味がする。構わず私は小さな舌を伸ばしながら、愛液ごと誠の唾液を吸い取る。しよっぱいのと甘いのが混じり合った、複雑な味。まるで私達の関係のように、複雑な味。

「誠お……ん、クチュ、もつと舌を出して、そう……ん、絡めるの、そう、上手よ……ん、クチュ……ん、うん、たまに吸ったりして、そう、ん……チュ、んっ……」

キスの指導なんて、初歩中の初歩なだけだな……それも腰を振りながらなんて。こんなシチュエーションに、私も誠も、かなり興奮している。内側からの圧迫がきつくなってきたのが判るし、膣の締め付けもきつくなっているのを自覚している。

「ほら、誠……ご主人様……淫乱メイドに、もつとお仕置きして……」

「うん、ほら、こう、こうか……腰、腰が、いやらしいよ……」

前後左右にくる腰。かき回される膣内。締め付けられる肉棒。もう、二人とも限界がそこまで来てる……。

「おねえ、ちゃん……いき、そう……」

「いいわ、いいわよ、そのまま、だしちやいなさい……ね、ほら、おねえちゃんも、いくから、ね、ね、まことお……」

見つめ合って、またキス。止まらない互いの腰。上と下からクチュクチュグチュグチュグ湿った音。むわつと咽せそうになるような男と女の匂い。とろけ合いそうな二人が、頂点へと上り詰める。

「いく、だすよ、おねえちゃん……ん、ぐっ！」

「いい、だして、またビュツて、して、おねえちゃんも、んっ！ あっ……きた、んっ！」

子宮に注ぎ込まれる二度目の精子。それを感じながら、またギユツと締まる膣。腰は止まり、唇は張り付き合い、言葉が塞がれる。抱きしめ合う二人が一緒になってビクビクと震えている。

「……ぷはぁ……もう、強く抱きすぎ」

「ゴメンお姉ちゃん……なんか嬉しくて、また一緒に逝けて……」

照れる弟が可愛すぎる。もう、あまりにも可愛すぎるから、繋がったまままた腰が動いちゃう。

「ちよ、お姉ちゃん……また？」

もう少し余韻を楽しみたかったのかな。んー、本当は私もそうなんだけど……なんか嬉しくなっちゃって、腰が止まらないのよね。

「んー、このまましても良いし、次こそアナルでもいいけど……どっちがいい？」
「いや、あの……少し休ませて欲しいかも……」

「もー、こんなに盛り上がりすぎてきたのに情け無いわねえ……テクニクも大事だけど、ちよつと体力方面を鍛えないとダメかしら？」

「あら……そう」

私は腰を持ち上げ、肉棒を私の中から引き抜く。ゴポツと、栓をされていた膣から大量の白濁液が同じく大量の愛液と混じり合いながら私の股を伝わり流れ落ちていく。

「お姉ちゃんのこは、もうこんなになってるのになあ……」

頭と肩はベッドに倒し、膝を立て少し足を開き誠へお尻を向ける。両手は後ろに回し、尻肉を自分でつかみぐつと開く。奥ではヒクヒクさせた菊座が見えているはず。

「入れたくないの？」

「……入りたいです」

もう、可愛い返事。体力の限界を感じながらも性欲が前に出てる。若さかなあ……そんな誠は私の尻肉にてをあてがい、その間へとつくに硬くしている肉棒を差し入れてくる。

「大丈夫よ、とつくに準備できてるからそのまま……んっ！ きたあ……」

「くっ、お姉ちゃんの中……凄い」

入るときには肛門を開き、奥へ奥へと誘う。根本まで入ってからは肛門をきつく締め、直腸で誠をうにうにと揉みほぐす。誠が腰を引こうとすればまた肛門をゆるめ、直腸で肉棒を舐めるように押し出す。

「凄いやお姉ちゃん……気持ちよすぎる」

「ふふ、もう他の女なんかじゃ満足できないでしょ」

その前に、誠は他の女を知らないんだけどね。そしてこれから知ることもないだろうけど。知するような機会なんか与えるもんですか。

最初はゆっくりだった腰の動きも、徐々に早くなる。それでも私のアナルは誠の肉棒を同じように迎え入れ、きつく歓迎し、優しく送り出す。

「誠は、ん、お姉ちゃんの、前と、後ろ……どっちが、好き？」

「はあ、うん、どっちも……だって、どっちも、気持ちいい、くっ、どっちも、お姉ちゃん、だし……」

ちよつと優柔不断な答えだけど、ふふ、まあ許してあげる。

「誠は、お姉ちゃんのこと、好き？」

「好き、大好き、だよ……お姉ちゃん、好き、好きだ……んっ、お姉ちゃん、お姉ちゃん！」

「はあ、んっ、誠……私も、私も……」

好き？

その言葉に戸惑って、私は声に出来なかった。私が……誠を？ 気に入っているのは確か。本当に可愛いと思う。だけど……もー・シヨボーの私が、人を好きになるってこと、あるの？ これが……そうなの？

「好きだ、お姉ちゃん、好きだ、好きだ、好きだ！」

「誠、まこと……いい、もつと強く、んっ！」

結論を出す勇気がなかった。それよりも、私はもつと誠を感じていたい。もつと、もつと深く、誠を感じたい。

「おねえちゃん、またいく、でる、でるよ！」

「うん、きて、まこと、まこと……おねえちゃんの、なか、なかに、おくまで、いっぱい、いっぱい！」

激しくなる誠の腰と、気持ち。私はそれを全身で受け止める。実直な彼自身が、私を激しき突き立てる。

「でるよ、いく、いく……んっ、くっ！」

「あっ、きてる、でて……おくまでえ、ドクドク、いつてる……おなかにい、ちよくせつ……ん、んっ！」

直接誠のミルクを味わいながら、私はギョツとアナルを締め付け最後まで搾り取るうとする。三度目の割に、たっぷりと注いでくれた。

「ふう……まことお、たっぷり出たねえ……」

「うん……お姉ちゃんの中、気持ちいいから……」

そろそろ体力の限界か、息がだいぶ荒い。これで打ち止めとばかりに、誠が私から肉棒を抜き取るうとする。

「……あの、お姉ちゃん……」

「んー、もうちよつとミルク欲しいなあ」

逃がさない。肉棒を抜かさないようぐつと肛門に力を込める。

「あの、流石にそろそろ……」

「いいわよお、誠は休んでなさいよ。後はお姉ちゃんが……ふふ、ご主人様の粗相を後始末させていただきます」

忘れていた演技を再開しながら、私はようやく肉棒を解放してあげた。しかし私はそこで手早く身体を回し、抜かれたばかりの肉棒を掴み、すぐさま口へと導く。

「メイドのアナルで汚れたご主人様を、キレイにしますね」

そもそも人間と違い私のアナルは排泄物なんか出てこないし、汚くはないんだけどね。

それでも私の愛液と誠の精液でベトベトになってるし、汚れてるのは確か。私はそれをピチャピチャと丁寧に舐め綺麗にしていく。

「あの……そんなことされたら……」

「されたら、なに？ あらあら、また大きくなっちゃって……ふふ、イケナイご主人様ですわねえ」

そろそろ大きくするだけで股間が痛くなってきたかな。ちよつと可愛そうかな……とは思うけど、美味しいから止められない。

美味しい？ そういえば……私は男のこれを本気で美味しいなんて思ったことなかったのにな……でも誠のは美味しい。本気で美味しいと思う。この味は止められない。で私は、あえて誠に問う。

「それとも、ここで止めますか？」

「それとも、ここで止めますか？」

決定権を誠に譲ってあげた。返ってくる答えを判っていないながら。

「……こんなところで止められたら……その、切ないよ……」

「ふふ、ご主人様のスケベ」

「そんなところが可愛い。」

「ん、チュ……ん、クチュ、チュ、んん……チュパ、クチュ、んチュ……」

「うっ、お姉ちゃん……はぁ、ん……」

私の頭を撫でながら、ちよつと苦しそうに、でも気持ちよさそうな顔で私を見下ろしている。私はそんな誠を、彼の大切で大好きなものをしゃぶりながら見上げた。

「お姉ちゃん……エロい、その顔エロいよ……」

「ん、ふふ……チュ、気持ちよさそうな顔しちゃって、ん、クチュ……エロいメイドは大好きですか？ んっ……チュ」

息を荒げながらコクコクと首を振る。私はその姿を見て口元を軽くつり上げた。大きくなった肉棒の根本を片手で軽く掴み、唇と一緒にしごきあげる。もう片方の手で陰囊を優しく包み軽くもみ上げる。舌は鈴口を突いたり包んだり忙しい。

「お姉ちゃん……もう……」

「ん、出して、このまま……エロいメイドの口に、クチュ、ぶちまけて……」

手を誠の腰に当て、激しく顔を前後させる。舌は亀頭に絡ませ、唇で陰茎を激しく擦る。

「出すよ、お姉ちゃん……ん！」

「んっ！ ん……ゴク……んっ、ぷはぁ……流石にちよつと少ないけど、まだまだ出るじゃない」

喉を鳴らしながら誠を味わい。唾液と精液が絡みついた舌でペロリと唇を嘗め回す。もちろん、見せつけるために。

「うっ……」

「この仕草、このエロさに、誠が反応を示すが、流石にもう肉棒にまで反応はない。」

「んー……」

とりあえず、指をくわえて見上げてみる。幼女ならではのなおねだり。

「無理です……ホント勘弁してください」

ちっ、体力無いなあもう……。

「天道寺さんが言っただけ……」

ベッドの上で、私は誠に抱かれながら横になっていた。この、折角の時間にあいつの名前が出てくるのはちよつと面白くないんだけど、私は黙って誠の話に耳を傾ける。

「モー・シヨボーの話……愛を知らずに亡くなった少女がモー・シヨボーになるって……」

誠の話は当然、私が彼以上に良く知っている話。だって私の出生に関わる話だから。

私達モー・シヨボーは、愛を知らずに死んだ少女が変化した妖怪だって言われている。

一説には……私達が鳥になるのは、鳥が「魂の象徴」だかららしい。これはモンゴルだけでなく、エジプトのラーなど、各国で見受けられるんだって。そのあたりの話は正直、どうでもいいんだけどさ。結果として私が生まれ、こうして生きてる。それだけのことだから。

「でね……少女が知らない「愛」っていうのは……その……「性愛」のことなんだって言うんだ……」

そう……これも知っている。私が知らない愛は、愛情とか恋愛とか、そっちの事ではなく、性愛……つまりさつきまで誠としていた性交の快樂ってことらしい。それを知らないから、モー・シヨボーは男を誘惑し快樂ではなく脳髓を求めるのだ……でもそれだった

ら、何故私は快樂を求めんの？ 脳髓も好きだけど……そこが疑問で、私は妖精学者の話をあまり真剣に考えたことがなかった。でも誠は、そこが気になっていたらしい。

「天道寺さんはね……お姉ちゃんが、愛っていう感情自体に変なプレッシャーを感じすぎてるって気にしてたよ」

まったくアイツは……余計なことを誠に吹き込まなくても……そうよ、だって快樂を求めている私に、他に知らない、感じられない愛ってなに？ 実際、今まで愛なんて……判らなかつた……今まで……。

「お姉ちゃん……ボク、お姉ちゃんのこと大好きだよ」

じつと私を見つめ、誠が真剣な顔で告白してくる。うわ……ちょっと止めてよ。まとも
に誠の顔が見られないじゃない……。

「お姉ちゃんは、ボクのこと……どう思ってるの？」

もー……はあ……頬が火照ってるのが自分でも判る。そして……そうね、もう、へんに意地を張るのは止めた方が良いわね。なんか上手くあの油豚天道寺に踊らされてるって気もして悔しいんだけど……そこももう、気にしちゃダメなんだろうな。

「すっ……好きよ。私は誠が、弟が大好きなブラコンよ！」

もー、こんな顔見せられない！ 私は誠の胸元に自分の顔を埋め隠した。はあ、ブラコンか……誠を本当の弟って認めた訳じゃないけど……というか、認めない方が色々世間的には無難っていうか……あーもー、そういうことはいいから、もうね、この恥ずかしい状況をなんとかして！ 絶対、絶対誠は今ニヤニヤしてるに決まってる！ 私の髪を優しく撫でながら、誠が口を開く。

「ありがとっ、お姉ちゃん……大好きだよ」

本当に素直な子……素直すぎるわ。可愛すぎ。そう、可愛すぎるのよ。ホント、本当に……愛してる！

「でも誠……もっとお姉ちゃんを本気にさせたかったら……」

私は顔を離し、じつと誠を見つめて言っちゃった。

「もつと体力付けて、技も磨いて、お姉ちゃんを気絶させる勢いでがんばれるようになりなさい」

「ちよっ……それは……」

「あら、お姉ちゃんのこと嫌い？」

「……好きです、はい、だからがんばります……」

よろしい。素直な子は可愛いわ。そんな子に、お姉ちゃんからのご褒美。私は誠の唇に自分の唇を押し当て、舌を入れ、ちよつと長めのフレンチキスをプレゼント。

「……この程度じゃ回復はしないか」

「いや、もう今日は勘弁してください」

クスクスと笑い合い、もう一度キス。気持ちを届けるキス。やっと素直になれた私からの、愛を届けるキス。

「好きよ、誠」

愛を知ったもー・シヨポーは、どうなるんだろう？ 成仏とかしちゃうのかな……それはないか。だって未練たらたらだもの。私は誠と、ずっとずっと、一緒にいるんだから。

「死ぬときは一緒に。出来れば腹上死させてあげる」

「……冗談になってないよ、お姉ちゃん」

えー、理想の死に方じゃない？ まっ、とにかくずっと一緒。ずっと幼い私を、ずっと愛してね、誠。